半導体漫遊記 ⑪⑨

湯之上隆

ラムリサーチのKLA買収

成否に2つのカギ

半導体製造装置メーカーの米ラムリサーチが、10月21日、同装置メーカーの米KLA―Tencorを106億ドル（約1兆2700億円）で買収すると発表した。

2014年の装置売上高ランキングでは、ラムは4位（48・6億ドル）、KLAは5位（28・7億ドル）で、この買収が成功すれば2社の合計は77・3億ドルになり、オランダASML（75・5億ドル）を抜いて2位に躍り出る。そして、1位の米アプライド（79・4億ドル）まで、あと2・1億ドルに迫る。アプライド、ラム＋KLA、ASMLの3社が、東京エレクトロン以下を大きく引き離し、今後この3社が装置売上高ランキング1位の座を争うことになるだろう。

しかし、大型M&Aが成功するとは限らない。13年9月に1位のアプライドと3位の東京エレクトロンが経営統合を発表したが、両社の株主総会では了承されたものの、米国政府の独占禁止規制当局の許可が得られず、この統合は15年5月に白紙撤回された。

今回のラムによるKLA買収は成功するだろうか。その行方を占うために、なぜアプライドと東京エレクトロンの統合が失敗したのかを分析してみよう。

第一の原因は、統合会社の規模があまりにも巨大だったからだと思われる。もし、アプライドと東京エレクトロンが統合すると、売上高は134・8億ドルになる。この規模は、14年の半導体メーカーのランキングの5位に相当する。

第二の原因は、統合会社が本社をオランダに置くことにしたことにある。この理由は、装置を購入する半導体メーカーから見ると、このような巨大装置メーカーの誕生は、迷惑である。なぜなら、巨大装置メーカーが価格支配権を持ち、装置のセット販売を仕掛けてくる恐れがあるからだ。これを危惧した半導体メーカーが、ロビー活動で米司法当局に猛反対したと言われている。

実効法人税率が、米国39・13％、日本36・99％に対し、オランダは25％と低いからである。さらにオランダには、研究開発費の税制優遇があり、ASMLの平均税負担率は10％を下回っているという。結局、米司法当局は、アプライドと東京エレクトロンの税金逃れを許すことができなかったということである。

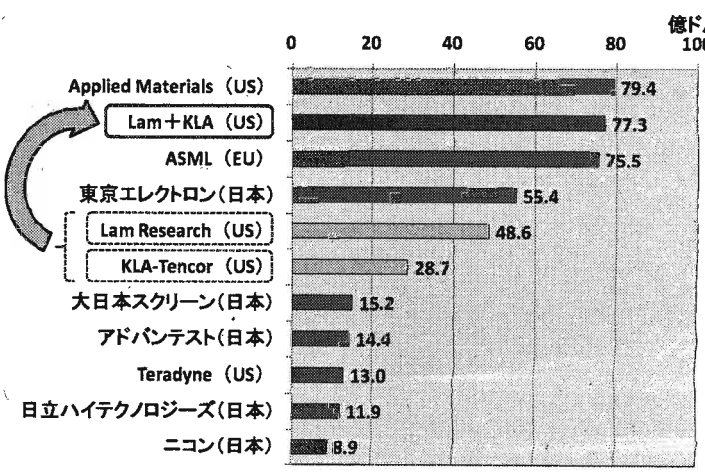

図1　半導体製造装置の売上高ランキング（2014年）

出所：Worldwide IC Manufacturing Equipment Sales (VLSI Research, April 2015)

以上を考慮した上で、ラムによるKLA買収の成否を考えてみよう。両社の株主総会と米司法当局の承認の二つをクリアできるかがカギとなる。

ラムはドライエッチング装置で世界シェア1位、KLAは検査装置で世界シェア1位である。しかし、両社が重複して開発している装置は無いため、両社の既存のビジネスは買収による影響を何ら受けない。よって、ラムおよびKLAの株主が反対する理由はない。

また買収が完了しても、半導体メーカーが嫌悪感を抱くほど突出する規模になるわけではない。そして両社とも米国に本社があるから、本社を他国に移すようなことはしないだろう。したがって、米司法当局も許可するのではないか。

（微細加工研究所・所長）